

船が来るとのことで、南京經由上海に着き、ここで乗船を待つこと十日間、米艦リバー船にて六月八日に博多港に上陸しました。そして復員となり、解散式を行いました。復員列車で深夜に広島を通過した時、特種爆弾で広島は全滅と聞き仰天しつつ、十日には唐柏の生家に帰ることができました。その時、母と祖母は健在で、私の帰還に歓喜の涙を流して喜んでいました。

私は復員後の昭和二十一年九月、関東配電(株)山梨支店へ勤務、昭和五十二年七月、塩山営業所を最後に定年退職しました。そして引き続き昭和五十二年八月より傍系の東電広告(株)山梨支社に入社して、昭和六十二年九月まで勤務しました。

長沙作戦

愛知県 相羽 鉞 雄

私は、大正十三（一九二四）年八月十二日生まれ、現在八十一歳です。戦争体験の労苦をお話致しますが、何分とも昔のことです。苦勞したこと、苦しかったことは忘れまして、楽しかったことのみが脳裏によみがえるものです。

私の生まれた所は、遠州灘に面して、西に伊勢湾が在り、東に渥美半島、西に知多半島と海国日本を代表するような地形で、その知多半島の名古屋への付根が「大府」です。

尾張の国は昔から偉人を多く輩出しました。戦国の将、織田信長、木下藤吉郎をはじめとして立派な人間を多く輩出しました。東と西の大都会の狭間にあり、踏まれても蹴られても頑張るぞの「氣迫」の精神が脈々と、伝統のごとくありました。

自宅は農業でして一町五反歩の田と畑を所有し

耕作しておりました。生活程度は上でなく、さりとて下でもなく、中程度位でした。家族は祖父母

（後年逝去）と両親の元に長男はじめ男子五人、女子三人の八人兄妹で、全員十二人の大家族でした。私は次男でした。

長兄は軍隊に出征中で、弟は予科練に志願して入隊、その次の弟は帝都防衛隊に勤務していました。末弟は国民学校に通っていました。妹達は学徒動員でそれぞれ工場（軍需品製造）へと出動、勤務していました。農繁期には近隣の人達の手助けで食糧増産を行っていました。あの頃は家内はもちろん、隣り近所の人々が協力し合いながら一生懸命に生きていました。厳しくとも心豊かな時代でした。

私は高等小学校卒業後は自宅で農業を手伝いながら「愛知県農産物検査官助手」として勤めていました。青年学校はあの当時は半ば義務的に通学せよとのことでした。一日一日が短くて一日三十時間も欲しかったものです。なお青年学校にて学

ぶことが、後々の軍隊生活、訓練において大変有益でした。

昭和十九年春、桜花爛漫の大府町立尋常高等小学校の講堂において徴兵検査が施行されました。陸軍将校から訓示がありました。徴兵執行官の外に軍医官と数人の助手を従えて、威厳を誇示し、それぞれ指示を行いながら全員無事終了となりました。受験者の人員は五十人位でした。最後に執行官から講評があり、それぞれに検査結果を呼び出して宣告をされました。自分は「相羽鉞雄、第一乙種合格」と宣告されました。

役場の兵事係から「第一乙種合格は即甲種合格に編入だぞ」と云われました。そして入営まで身体の健康に充分注意してくださいでした。心の準備は完了していました。

この時期は皇軍（日本軍隊）はもちろん、海軍は各海戦で惨敗を重ね（大本営発表は嘘だった）、陸軍も至る所の戦闘に敗けて「玉碎戦法」を敢行しているとのことでした。

昭和十九年九月三日、「中部第二部隊旭隊へ入隊せよ」との通知がありました。当時名古屋第三師団は、中支戦線にて戦闘中との噂でした。自分達に支給された軍服は、すべて継ぎ接ぎで、補修はしてあったが軍服・衣料・軍靴も変形していて、靴底には当て革が打ち付けてありました。武器、兵器類は一切無しでした。そして雑のうと竹製の水筒が支給されました。

二、三日後の深夜、防諜上一切の隠密行動で名古屋駅を発車しました。自分達四、五人は貨車に乗車を命ぜられ、乗り込みましたが驚きました。先客様がいたことです。軍馬が八頭、「ハテ面妖な？」ことだと思つていますと、下士官が来て「貴様達は農家出身である。馬の面倒を見よ。命令だ」でした。馬は可愛い動物です、愛情を持って接すれば、自然と情が通じて懐かしそうにして人に向かって来ました。

本当に賢い動物です。馬脚（足元）に人間が横たわつて寝ていても踏みつけることもなく、下関末な建物）が三つ四つ散在していました。ここで四カ月間の教育が行われ第一期の検閲は終了でした。自分は青年学校で勉強していたことが役立つて、楽々と検閲終了でした。

なお中支戦線には第三師団（秘匿号・幸兵団・名古屋編成）がいました。歩兵第六連隊（幸第三千七百二部隊・名古屋編成）をはじめ、静岡歩兵第三十四連隊・岐阜歩兵第六十八連隊・第三師団管下騎兵第三連隊・野砲兵第三連隊・工兵第三連隊・輜重兵第三連隊・師団通信隊・兵器勤務隊・衛生隊・野戦病院及び病馬廠等々でした。

自分達は揚子江（長江）の中間点の要衝である武昌へ集結せよとの命令を受けました。そして完全軍装を整えました。自分は擲弾筒射手を命ぜられて擲弾筒を携行することとなりました。

長沙戦線へ出陣することが決まりました。連日連夜の強行軍でした。この頃は蒋介石の国民政府軍か、毛沢東の中国共産党（八路軍）かは不明でしたが、彼等は地理に明るく、自分達は不案内の

まで行きました。ここで乗船、出航して釜山上陸とつつがなく進みました。軍馬は誰れか他の兵隊が世話していました。

また列車に乗り、朝鮮半島を北進しました。新義州で鮮満国境を通過し、続いて満支国境の山海関を通過しました。いよいよ支那大陸です。皆で気合を入れました。その間飲料水は停車する駅で、例の竹筒で水を汲みました。水の無い駅の時など「機関車の排出する蒸気の熱水」を汲みました。

また主食はここでも「握り飯」でした。綺麗だとか不潔だとか云うことなく「握り飯」を軍帽に入れたり、手づかみにして手渡ししたりしました。誰がどこで作ってくれたのか、一切不明でした。

出陣の時の携行兵器は五人に一丁当てる三八式歩兵銃でした。ただし弾丸は九九式弾丸を各人六十発携行しました。荒漠たる大地を列車は何日か走りまして「随懸」と云う所に着きました。中支派遣軍（随懸教育隊）で初年兵教育を行うのだと云われました。一木一草も無い広場に木造兵舎（粗

敵地での作戦です。昼間行軍は飛行機にて襲撃されますし、夜行軍するところからかともなく敵が現われて攻撃して来ます。闇夜に鉄砲で銃弾は大丈夫だったが、接近戦は危険が伴うために、夜襲と知ったら第一番に擲弾筒を敵の上空に向かって二発か三発打ち込むと敵は退散しました。これが自分の任務（役目）でした。

敵軍も執拗に迫つて来ました。押せば引き、引けば押すと云う柔軟な戦法でした。食糧も不足し体力は弱まりました。落伍は即ち死亡です。隊列を離れ、取り残されることのないように全員協力しながら行進しました。中には体力が弱まって駄目だと云う戦友は、軍馬の綱で縛つて、馬に引張ってもらつて行軍した戦友もいました。追求部隊のこの悲惨な言語に絶する行軍は忘れることが出来ません。

雨が二日か三日降れば、道路も耕地や草地まで一面の泥海となるし、晴天が続きますと、一陣の風で砂埃りが舞い上がり、目も口も開けられない

始末でした。これは「天敵」でした。この頃には長沙作戦に参加していたらしいと、後にて思いました。

部隊名も正式には「支那派遣軍・第六方面軍・第二十軍（隷属）秘匿号・秋霜」でした。昭和二十年二月編成の独立歩兵第五百九大隊でした。友軍は独立歩第五百十大隊、同独立歩第五百十一大隊、同独立歩五百十二大隊、同独立歩五百十三大隊、及び独立混成第八十六旅団砲兵隊、独立混成第八十六旅団工兵隊、独立混成第八十六旅団通信隊等で、急遽編成された混成部隊でした。

なんだかごそごそやっていた頃が長沙作戦だったようでした。西も東も分からぬままでした。

昭和二十年八月二十二日、はじめて終戦を知り愕然としました。戦争には勝たぬまでも無条件降伏だというような不甲斐なき敗戦とは、支那大陸の奥地では思いもよらぬ知らせでした。

自分達の部隊は結局二月に編成された後、わずか半年余りで武装解除となったのです。中国正規

軍（蒋介石軍）に嘉魚というところで武装解除を受けました。その後の食糧調達が大変でした。支給、配給は一切無しでいかに上手に活用するかに苦心しました。

東奔西走して調達を行い、時には現地の住人と仲良く、泥水の小川（クリーク）に入って、魚取りに励んだこともありました。河魚はどれも大きくて、日本では見たことのないような大物ばかりでした。鯉、鮒、鯰、鱈等々で大きな獲物になると一メートル以上もあり、驚くほどの大物ばかりでした。

中支付近でも大陸性気候で、日中と夜間の温度差が大きく開いていました。また三寒四温といって、三日寒くて四日は温かい。そうした温度差が戦傷病患者や栄養失調の病人には厳しかったと思えました。次々と逝去した人が出ました。戦傷病死者です。

昭和二十一年五月末頃でした。上海へ行けと命令が来ました。いよいよ復員だ、喜んで船に乗り

込み、大河を何日かかかって下り、上海へ到着し

ました。数日後に復員船に乗船命令が出ました。体調不良者、病床にある人はベットのままで乗船しました。出港の警笛で船は岸壁を離れました。

「サア、皆元気で日本へ帰ろう」を合言葉に談笑していました。ベツドで乗船した戦友が二人、船中で死亡しました。

船中で死亡した場合は「水葬礼」で、甲板上から海中に遺体を送る儀式がありました。これは万国共通の船長の権限としてあるものです。それにしても不憫で涙が止まりませんでした。全員で「海ゆかば」を斉唱して送りました。今少し元気でいたら日本に帰れたのと思うと残念でした。最後になって悲愴な心になりました。

船は日本の領海を航行して行きました。博多港に入港、上陸しました。ここで身体の消毒が行われました。蚤や虱、南京虫などの害虫やその他の伝染性疾患の検査を受け、復員手続きも完了して、部隊は解散となりました。そして鉄路を一路東上

して名古屋を目指しました。

沿線の街も見渡す限り焼野原で、その中にはバラックが建っていました。敗戦とは無残なものです。名古屋も金の鯨の大神守閣も無く、なんと惨憺たる現状に肝を潰すとはこの時の私の心境だと思えました。ともかくにも呆然自失ということでした。

大府に帰って、自宅の玄関で軍靴を脱ぎ、両親はじめ全兄弟、家族の顔を見て、はじめてやれやれと思えました。昭和十九年九月から昭和二十一年五月で、わずか一年九カ月の間、私はなにをしたのだらう。

それから数日経過した頃に高熱が出ました。医者にはマラリアだといってキニーネを調合してくれました。その後の数カ月の間、毎日午前九時から十時に発熱し、また午後三時から四時頃と毎日二度高熱が出ました。その後も治癒したと思っていきましたが二カ月、三カ月経過した頃に、突発的に発病しました。しかし二年か三年ほどした頃から

は発熱しなくなりました。完治したのだと思います。

現在思うと充分長生きしたと思います。青春の
一時期に軍隊へ行き、戦争という悪夢を見ました
が、わずかな時でしたが、二度と戦争の無きこと
を望み、多くの戦没者の泰らかな眠りを祈って
います。

大陸「湘桂作戦」に参加して

愛知県 清水辰夫

私の家族は父、母、私と妹の六人、第二人の十
一人の大家族で家業は米穀商でした。

昭和十七（一九四二）年三月の徴兵検査で第一
乙種となり、昭和十八年四月八日、氏神様の社頭
で武運長久の祈願をし、半田駅を歓呼の声に送ら
れ、東海道線を西に姫路の野砲兵第五十四連隊補
充隊に同郷のS君と共に入隊しました。

播磨平野に浮かぶ白鷺城を望見できるこの兵舎
で、ラッパによる生活が始まりました。入隊後、
我ら初年兵は内地で教育されるのではなく、南支
派遣「鳳兵団」野砲兵第百四連隊の要員として広
東に向かうためいったんここに入隊したのでした。

輸送船待ちの一カ月余は、被服・帯剣受領・身
体検査・予防接種・軍歌演習・訓話・号令調整・
各個教練・乗馬練習等基本的な訓練が主なもので